

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	『蒲団』における「事実」
Author(s)	テディ ルスティアディ,
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1990 : 11 - 16
Issue Date	1991-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039278
Right	
Relation	



『蒲団』における「事実」

テディ ルスティアディ

—はじめに—

田山花袋が『蒲団』を書いたのは明治四十年（1907）であった。これは「新小説」、すなわち全く新しいスタイルの小説であった。彼は島崎藤村と並んで、日本の自然主義文学の先駆者である。そして、この『蒲団』は島崎藤村の『破戒』の翌年に書かれた作品である。『蒲団』の解説の中で、福田恆存が、

「『蒲団』はまえに述べましたように、前年の『破戒』とともに自然主義文学の礎石となった作品であります、…」¹⁾

と言っているように、この二つの作品は自然主義文学の代表的な作品となったのである。

『蒲団』は私小説の作品である。私小説は自然主義文学の典型だと思われる。福田は私小説について、同じく『蒲団』の解説の中で次のように書いている。

「日本の自然主義文学が私小説に転じていったことは、すでに周知のことです。」²⁾

私小説は自己が中心の作品であるから、作者の性格が見られると思う。その上で『蒲団』は先に述べたように、日本の自然主義文学の代表的な作品であり、これを読んで、私は少しでも日本の自然主義文学が分かるようになったと思う。

(一)

『蒲団』のストーリーはおよそ次の通りである。

主人公の竹中時雄という作家は、二十六歳で、妻と子供三人があるが、ある日、横山芳子という女弟子を取った。

横山芳子は神戸の女学院の生徒で、美しい女であった。時雄が初めてこの女を知ったのは手紙からだ。彼女は時雄の門下生になることを希望し、彼に手紙を書いたのだった。芳子に対する時雄の最初の印象は次のようであった。

「文字はすらすらした字で、よほどハイカラ女らしい。」³⁾

最初の手紙を出した年の翌年の二月に芳子は東京に来た。そして、時雄はこの女弟子と恋

(2)

に落ちた。しかし、彼は自分の恋を実現できなかった。彼は家族を持っている上に、芳子に対しては小説の先生として、自分の権威が大切だったからである。

芳子が時雄の家に滞在している間、時雄の生活は変わった。それ以前は寂しかった時雄の生活だったが、その時は結婚当初に再び帰ったような喜びの生活であった。しかし、このような生活は長い期間は続かなかった。それは芳子に恋人ができたからである。時雄の苦しみは次のように描かれている。

「けれども、その愛する女弟子、寂しい生活に美しい色彩を添え限りなき力を添えてくれた芳子を、突然人の奪い去るに任ずるに忍びようか。――時雄は悶えた、思い乱れた。」⁴⁾

芳子の恋人は田中秀夫といい、二十一才であった。二人の恋は神聖な恋であった。彼らの恋は睦まじく続いた。そして、秀夫は文学を志して東京に来たのだった。結局、秀夫に東京に来られて、時雄は男としての恋の心と先生としての権威が混ざったが、芳子を弟子として教育する責任があるので、先生としての態度を取らなくてははいけなかった。その態度は次の時雄と秀夫の対話のように描かれている。

「それはいかん。そう反抗的に言ったって為方がない。腹の底を打ち明けて、互いに不満足のないようにしようとする為のこの会合です。君は達って、田舎に帰るのが厭だとならば、芳子を国に帰すばかりです。」

「二人一緒に東京にいることは出きんですか。」

「それは出きん。監督上出きん。二人の将来の為にも出きん。」⁵⁾

結局、芳子は父親と一緒に故郷へ帰る事を選んだ。

そして、時雄は性欲と悲哀と絶望とを感じながら、芳子が使っていた『蒲団』に顔を埋めて泣いていた。これがストーリーの終わりである。

(二)

まず、江見水陰の明治三十八年六月二十五日の「自己中心明治文壇史」の中での告白を見てみよう。

「此夜塚越七年の家に一泊。翌日同別荘に追慕文学を開き、帰途には又前の三人と成ったがこの車中で花袋が自分で向かって――人生寂莫――に就て煩悶に耐えぬ。何とかして救われる道があるまいか、と訴えた。」⁶⁾

その時、江見水陰はその花袋の悩みに対して慰めたが、後にこの悩みが『蒲団』にある事件だったと分かってきて、慰めたことが余計馬鹿々々しくもなったと言っている。

また、永代美知代は「花袋の『蒲団』と私」の中で、次のように述べている。
 「私は『蒲団』のモデルであることは事実です。」⁷⁾

この二人の告白から考えた場合、『蒲団』のモチーフになった材料は事実の出来事なのであろうか。当時の花袋の悩みと時雄の悩み、そして、永代美知代の告白と小説が述べている芳子との関係を見れば、事実が『蒲団』の材料になったのは明らかだと言えるであろう。

永代美知代が初めて花袋に手紙を送ったのは明治三十六年八月であった。そして、東京に来たのは翌年の二月であった。⁸⁾『蒲団』のなかに次のようにある通りである。

「芳子が父親に許可を得て、父に伴れられて、時雄の門を訪うたのは翌年の二月で、
 …」⁹⁾

そして、その時の花袋の生活の様子は時雄を通して、『蒲団』の中に次のように描かれている。

「家を引越歩いても面白くない、友人と語り合っても面白くない、外国小説を読み
 渉猟しても満足が出来ぬ。いや、庭樹の繁り、雨の点滴、花の開落などという自然
 の状態さえ、平凡なる生活をしてさらに平凡ならしめるような気がして、身を
 置くに処は無いほど淋しかった。」¹⁰⁾

芳子の恋人について、また永代美知代が前掲書の中に「芳子の恋人秀夫と似た実在の私の恋人」¹¹⁾と書いている。やはり、芳子の恋人のモデルも美知代の恋人である。それを見ると、花袋は本当にこの事実をもとにして、この作品を書いたようである。

小説家というものは皆、作品の材料のために事実を取る。だが、その事実を芸術的に再構成することにより、文学作品にまで高めるのである。その事実は作品の所々に隠れているのである。しかし、自然主義の文学はそれとは違って、「ありのまま」というモットーによって、事実がそのまま作品に入っている。

花袋はこの『蒲団』を、本当に「ありのまま」のモットーによって書いた。彼は自分の真意、生活、そして自分の周囲にいる者を大胆で「そのまま」に書いた。私にとっては花袋が『蒲団』において現実の自分の周りの人を材料として扱っていることから、『蒲団』は大胆な作品であり過ぎると思う。しかし、文学的に考えれば、『蒲団』は「ありのまま」大胆に書かれているからこそ自然主義文学の代表的な作品になっているのである。

花袋と「事実」については相馬庸郎が「花袋再考 — 『時は過ぎ行く』を中心に — 」の中で次のように述べている。

「花袋は『事実』そのものを本当に尊重したのではなく、『事実尊重』という観念を尊重したのではなかったか。」¹²⁾

(4)

この引用部分の意味は、花袋は文学作品を書く上で事実の要素を大切だとしたが、しかしさらに一番大切なものとして、文学的な作品ということ考えた。だから、『蒲団』を文学作品として考えれば、たとえこの作品がつまらないとしても、表現の方法を見れば、立派な作品であると思う。しかし、話の内容とその裏にある事実を結びつけて考えると、『蒲団』は「恋」の問題を扱っているが、妻も子供も持っている時雄が若い女弟子を大変愛してしまう、というのは、許された限度を越えていると私は思う。だから、小林一郎が『田山花袋の研究』の中で述べているように、『蒲団』が扱っているのは「恋」と「性欲」の問題である、ということに私も賛成している。¹³⁾ また、中村光夫氏は「浮気の出来損ひ」¹⁴⁾ と言っている。『蒲団』に否定的な意見を述べる人は中村氏の他に平野謙氏もあり、現在でも否定的な意見の人が多と思う。

しかし、それとは別に、『蒲団』には良い点もある。「恋」はどこでも、誰にでも起こる可能性がある。また、「恋」は複雑なもので、誰でも「恋」のために幸福になる可能性もあるがその逆に不幸になる可能性もある。だから、この「恋」の持つ二つの側面をふまえてこの作品を読むとき、読者は読者自身の生活における、作品のなかの「先生」のような「恋」の問題にも対応できるようになるのである。

(三)

以上のように、登場人物と内容、作者の現実の生活、様々な文学者たちの告白などを結びつけて『蒲団』を読むと、作者が「事実」は二つに分けることが出来る。つまり、次のようにである。

- (1) 作者自身における事実
- (2) 作者の周囲における事実

(1) の事実はこの作品の根本的なテーマになった。それは作者の現実の悩みと淋しさである。ただし、ここで私が思うのは、芳子に対する時雄の恋は事実であるのだろうか、ということである。つまり、花袋は女弟子美知代を本当に愛して妻にしようとしていたのだろうか、という疑問である。私はそうではないと思う。私は、花袋が家庭的な悩みや淋しさから『蒲団』を書いたのは確かだが、美知代に恋をしていたとは思わない。

また、(2) の事実は(1) のモチーフを文学作品として実現するための材料である。しかし、その材料が完全に作品化されているのではない。また、永代美知代についても、彼女は『蒲団』の女主人公(ヒロイン) 芳子になったモデルではあるが、現実には女主人公ではないと言っているのである。

その二つの事実を、花袋は「ありのまま」で表わしているのである。しかしながら、そのように事実を完全に作品化しているわけでもなく、また作者自身が創作した部分もあるにもかかわらず、『蒲団』が事実を「ありのまま」に表わしていることは明らかであり、だからこそ『蒲団』は大胆な作品であり、日本自然主義文学の代表作品となることが出来たのである。

引用及び参考文献・論文

- 1) 福田恆存：「解説」 田山花袋：『蒲団』 p.176 新潮社 1988第60刷
- 2) 福田恆存：「解説」 田山花袋：前掲書 p.176
- 3) 田山花袋：前掲書 p.13
- 4) 田山花袋：前掲書 p.22～23
- 5) 田山花袋：前掲書 p.73
- 6) 小林一郎：『田山花袋研究』 p.36 桜楓社 昭和51年2月20日
- 7) 永代美知代：「花袋の『蒲団』と私」
『自然主義文学 一日本文学研究資料叢書一』 p.202 有精堂 昭和55年2月10日
- 8) 小林一郎：前掲書 p.76
- 9) 田山花袋：前掲書 p.14
- 10) 田山花袋：前掲書 p.12
- 11) 永代美知代：前掲論文 p.203
- 12) 相馬庸郎：「花袋再考 一『時は過ぎゆく』を中心に一」
『自然主義文学 一日本文学研究資料叢書一』 p.169 有精堂
- 13) 小林一郎：前掲書 p.38
- 14) 中村光夫：『日本の近代小説』 p.36 岩波新書 1989第48刷

参考文献

- 福田恆存：「解説」 田山花袋：『蒲団』 新潮社 1988第60刷
 小林一郎：『田山花袋研究』 桜楓社 昭和51年2月20日

(6)

中村光夫 : 『日本の近代小説』 岩波新書 1989 第 48 刷

永代美知代 : 「花袋の『蒲団』と私」
『自然主義文学 — 日本文学研究資料叢書 —』 有精堂 昭和 55 年 5 月 1 日

相馬庸郎 : 「花袋再考 — 『時は過ぎ行く』を中心に —」
『自然主義文学 — 日本文学研究資料叢書 —』 有精堂 昭和 55 年 5 月 1 日

『日本近代文学と外国文学 — 日本近代文学館編 —』 読売新聞社 昭和 49 年 2 月 10 日